

戦国時代、駅・加沢という地は、山寺や出羽三山詣の人々が行き来した二口越え最上街道の中でも西部防衛の要、要害の地として武将の館が築かれる土地でした。

今に受け継がれる町並みはこの頃に形づくられ、今日まで人々の暮らしが連続と営まれています。

また、四季折々に印象を変える銀白の白岩や、人の手によるものながら、農地を潤す水を湛え地域の生活を支えてきた加沢ため池のたたずまいなど、心和む風景が静かに迎えてくれる土地でもあります。

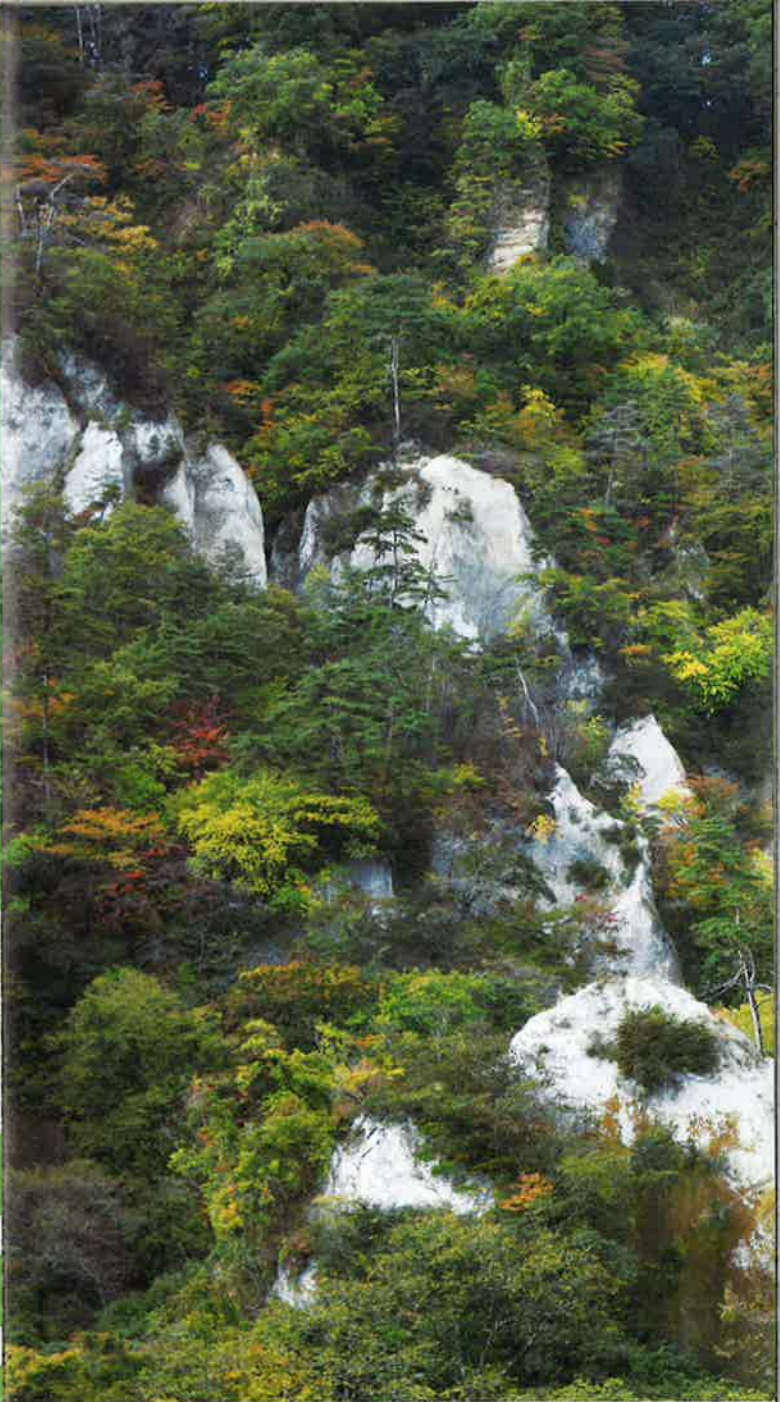


中世に思いを馳せながら、眼前の風景に心いやされる小さな歩き旅に出かけてみましょう。



あるく 駅・加沢

— 中世の遺構と心なごむ風景を訪ねて —



豊後館跡にたたずみ、大きな土塁や枡型形状の虎口（こぐち）を配する実戦の備えを目にする、土地の人々がここを「矢来（やらい）」と呼ぶことに納得し、この地で練り広げられていたであろう激しい戦に思いが至ります。

豊後館を堅固な砦にしている小滝沢は、深い溪谷に文字通りの小振りな流を二つも持つ、まさに要害の沢です。

その昔、館の主が最上勢を迎え討つため野尻に出陣したおり、守りが手薄になった館を名取川を挟んだ向かいの白岩から攻め込まれ、留守を守っていた奥方がわが子を抱いて小滝沢へ身を投じたという逸話が残っています。この逸話が別名「子抱沢」と呼ばれる由縁のことです。

また、ここは天正十九年（1591年）に起きた大事件の現場でもあります。館の主である馬場楨津守定重・頼重親子（頼重は後に、伊達政宗の命により、敵対していた最上氏に内通した、桃生郡深谷大曲（現在の東松島市大曲周辺）領主長月鑑斎を誅殺したのです。勇将として知られた長月鑑斎を討つことで、定重は大いに武名を上げたと伝わっています。ひよっとして豊後館に漂う雰囲気は月鑑斎の無念の思いでしょうか。

いってみっぺ 秋保 あるく 駅・加沢

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市
連絡先：秋保総合支所総務課（022-399-2111）
秋保市民センター（022-399-2316）

体感 中世武士の息吹 上館・豊後館
現代に生き続ける先人の想い 加沢水路隧道
銀白の奇勝 白岩……

掲載されている情報は、平成29年3月現在のものです。

訪れてみたい秋保
二口街道ツアー 62

No.15

